中学校国語　その二

[二]　次の文章を読んで、(一)～(六)の問いに答えなさい。

生命体の意識の成立には他者との交渉という契機が不可欠である。ところが、自己の内面に沈潜し黙して語らない者同士が対面しても、意識の生動性は立ち上がらない。それを活性化するのは、身体の運動を介した他者との交渉ないし情報交換（コミュニケーション）なのである。そこには瞑想的自己にはない生命の躍動がある。意識の本性は、この生命の躍動にうらうち[ア]された自己関与のダイナミズムのうちに求められなければならない。「内面」というものは、最初から出来上がってそこにある静的事実ではなく、他者との交渉から関心が自己へと向かう際のベクトル変換の「動き」そのものなのである。つまり、それは延長を欠いた点ではなく、点から点へと動く方向性を示唆している。この点を顧慮して、いわゆる内部と外部ないし主観と客観の関係も捉え直されるべきである。こうした対立項は、相互に全くはいじょし[イ]合うような実体的性質のものではなく、自己関与のダイナミズムから派生する観点の布置として相対的なものなのである。そもそも行動と密着した意識には主観性の絶対化という観点がない。(1)それは(2)主客未分の純粋経験と行為的認知を基調としている。

意識と行動の関係を考える際に顧慮されるべき重要な契機はまだある。それは自由ないし自由意志である。自由意志は常に行動によって媒介され、多くの場合後者によって表現される。つまり自由意志は内面にとどまるだけの思考内容ないし観念ではない。そもそも環境への関わりや他者との交渉なしには「自由であろうとする意識」は生じない。我々は、おいしいものを食べようとしてそれをじやま[ウ]されると、自らの権限としての自由を主張したくなる。また豪雨や突風にさらされると、樹木や建築物と違って、自らの意志で自分を安全な場所へと移動させる。この場合も、頭の中で「豪雨が止めばなあ[a]」と仮想現実を捏造するのではなく、実際に身体的行動を起こすのである。いずれにせよ自由は(3)内面的意識にとどまる現象ではない。それは意識と行動の両方向に張りめぐらされた(4)心身未分の有機体的現象なのである。

こうした点を考慮すると、自由意志の問題を心身二元論によって解明しようとする立場は本末転倒であることが分かる。二元論者は、自由意志を脳の生理的活動のもつ物理的因果性から切り離したがるが、それは有機体の環境への関わりとしての行動を無視して、自由意志を内的観念に貶めているからにすぎない。問題は、自由意志が脳の物理特性から説明できないので後者から切り離すべきかどうかではない。むしろ、それが意識と行動の相即性のうちで生起する心的（というより有機体的）行為であるという点に着目すべきなのである。ちなみに脳の神経生理学に関するいかに深い知見をもっていようとも、脳が身体に有機統合され環境への関わりにおいて機能する情報システムであることを理解できないと二元論にだらく[エ]してしまう。エックルズはその典型であった。自由意志が内的観念にとどまるものでないのと同様に、脳もまた[b]他の脳から隔絶した情報システムではないのである。

最後に興味深い現象を提示しておこう。それは、内面性を否定する立場の方が心の大切さを捉えることに成功している場合がある、ということだ。後期のウィトゲンシュタインは「内面的心の状態など実は存在しない」ということを執拗に論究している。これは形而上学的自我を主張していた前期の立場への自己批判も含んでいるのだが、彼が一貫して大切にしていた哲学の主題を示唆している。それは「語りえないもの」ないし「倫理的なもの」である。周知のように彼は内面的苦悩に生涯苛まれた人であった。同時に素朴[c]な福祉的行為を尊んでもいる。このような彼にとって、内面性に沈潜することは一見深遠なものに見えるが、実は偽善的で軽薄な思考態度に他ならないものに思われたのである。「心」とは他人への素朴な思いやりから生じる「関係的存在」である。それを尊重するということは、唯心論や神秘主義を批判することでもあるのだ。

(一)　‖　線部分ア～エを漢字で書け。必要に応じて送りがなも書け。

(二)　～　線部分a～cの品詞名を書け。

(三)　―　線部分(1)は何を指し示しているのか。十字以内で抜き出して書け。

(四)　―　線部分(2)「主客未分」と(4)「心身未分」をそれぞれ説明せよ。

(五)　―　線部分(3)の「内面的意識」とは何か。二十字以内で抜き出して書け。

(六)　この文章の要旨を八十五字以内で書け。

[三]　国語科の書写の学習指導において、指導計画を作成する上で配慮すべきことを三つ書け。